

## 新刊紹介

著者	里見 信生, 清水 建美, 鈴木 三男, 依田 清胤
著者別表示	Satomi, Nobuo, Shimizu, Tatemi, Suzuki, Mitsuo, Yoda, Kiyotsugu
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	40
号	2
ページ	6p.
発行年	1992-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00055715">http://hdl.handle.net/2297/00055715</a>



mm longis, plerumque glabris, calycibus lanceolatis longe rostratis, utrimque tomentosus, petalis albis ovatis vel late rhombeo-ovatis horizontale patentibus corrugatis apice acutis raro obtusis vel apiculatis, ca. 15 mm longis ca. 13 mm latis. Stamina numerosa, antheris oblongis 0.7-0.9 mm longis, filamentis albis linearibus 3-6 mm longis glabris. Pistilla numerosa ca. 5 mm longa, ovariis superiore externe et stylis interiore longe pilosis, stigmatibus pallide porphyreis verrucatis. Pollina plerumque sterilia. Fructus ignotus.

**Nom. Jap.** Gosho-momiji-ichigo, nov.

**Hab.** Japonia. Honshu. Pref. Yamaguchi: Saba-gun, Tokuji-cho, Notani-shimo, H. Masaki, Jun. 4, 1985 (PF1.\*\*\*); N. Naruhashi & H. Masaki, no. 86042901, Apr. 29, 1986 (Fl.) -Holotypus in Herb. Univ. Kyoto (KYO), Isotypus in A, B, E, K, KANA, MAK, OSA, PE, SHIN, TI, TNS, TUS, etc., no. 86042902, Apr. 29, 1986 (Ster.); ibidem, cult. in Bot. Gard. Toyama Univ., N. Naruhashi, Apr. 27, 1988 (Fl.), May 11, 1988 (PF1.), Apr. 12, 1989 (Fl.), May 6, 1989 (PF1.), Apr. 30, 1991 (PF1.), May 11, 1991 (PF1.), Apr. 25, 1992 (Fl.), Aug. 28, 1992 (Ster.); Saba-gun, Tokuji-cho, Notani, H. Masaki, Apr. 5, 1990 (Fl.); Saba-gun, Tokuji-cho, Notani Kami, Apr. 8, 1990 (Fl.); Saba-gun, Tokuji-cho, Notani Nakamura, H. Masaki, Apr. 14, 1992 (Fl.); Saba-gun, Tokuji-cho, Shidenokig-

awa, H. Masaki, Apr. 14, 1992 (Fl.), Apr. 17, 1992 (Fl.), Aug. 17, 1992 (Ster.); Saba-gun, Tokuji-cho, Yasaka, Makata, H. Masaki, Apr. 8, 1990 (Fl.); Saba-gun, Tokuji-cho, Yasaka-kami, H. Masaki, Nov. 4, 1990 (Ster.). (\*\*\*: after flowering)

#### 摘 要

山口県佐波郡徳地町野谷にはゴショイチゴが良く見られ、その付近に一般的なモミジイチゴとの間に雑種の可能性があった。この新雑種は1983年山口県立柳井高等学校教諭南敦氏によって発見され、1985年に真崎が、1986年に真崎と鳴橋が現地を確認し、その年より富山大学で栽培、観察されて来た。春はじめの葉の展開のころから花のころは、この植物の全体が赤身を帯び、赤いモミジに似てきれいである。手の平型をした葉は、その裂片が端正でゴショイチゴよりもきれいである。そんなところから、この植物の種小名を *calopalmatus* とした。体つきや多くの形態的な特徴は、その推定される両親であるゴショイチゴとモミジイチゴの間であった。しかし、葉の形においては、独自の形態と見なされる点もあった。ゴショイチゴとは茎や葉に赤褐色の色が着くこと、モミジイチゴとは葉が5-7裂片に切れ込み、手の平型をすることで、区別される。この雑種は花粉の稔性が0.9%とほとんどなく、開花後すべての花は枯れてしまう。また、栄養繁殖の能力は強くない。(Received August 25, 1992)

○ 広島市立中央図書館 山県草木志 (複製) 平成4年3月31日発行。A4判, 300頁。非売品。

“山県草木志”は小田好道が、安永9年(1780)、広島県山県郡の草木について記述し、広島藩に差し出したもので、原本は現在、広島市立中央図書館に浅野家本として所蔵されている。他に小田家本(写本)が伝えられているが、これは前欠本で、完本はこの浅野家本のみという貴重なものである。しかし、白井光太郎先生はこの本の存在を知らなかったようで、その著“日本博物学年表”には小田好道の名も“山県草木志”の書名も記入されていない。

著者、小田好道は享保5年(1720)、代々医を業とする家に生れたが、11才で父を亡くした。気丈な母は彼を苦労して育てたことは勿論であるが、彼も亦苦労して医術を独学で学び医者となった。しかし、多才の彼は本業の他に瓶花(生花)や俳諧を好み、特に後者では其滴という名で、この地域の指導者の立場を果している。

“山県草木志”は“本草綱目”の分類に従って13類に区別し、山草之類43種、芳草之類21種、湿草之類89種、毒草之類31種、蔓草之類29種、水草之類11種、石草之類11種、苔之類10種、雑草之類5種、菜之類57種、穀之類31種、果之類32種、木之類75種、計445種が登載されていて、植物の漢名、続いてその古名・和名ならびに、特に「土俗……と云」「今……」とこの地方の呼称や当時の呼称を記し、以下それらの生育する場所、形状、品質、利用法などが述べられている。(里見信生)

○ 愛媛県林材業振興会議 ふるさとの森—えひめの社寺林 B5判, 208頁。平成4年3月31日, 財団法人愛媛の森林基金(〒790 松山市一番町4丁目4-2, 愛媛県森林林業課内)発行。1500円+送料380円。

社寺林, それは規模の大小が様々であるけれども、多かれ少なかれその地域の原植生を残していて、貴重な存在とすることができる。

本書は愛媛県内1240社余りの内から、東予地方67社, 中予地方53社, 南予地方79社, 計199社を選び、

それぞれの写真に石川早雄, 金子 章, 松井宏光, 高市是博, 得居 修, 辻田昭夫の6氏が解説文を分担執筆している。この中で国及び県の天然記念物指定がされているものは国2件(一宮神社社叢:新居浜市一宮町, 大山祇神社社叢:越智郡大三島町), 県7件(三皇神社社叢:川之江市妻島町, 客神社社叢:越智郡菊間町西山, 高野川神社社叢:伊予郡双海町高野川, 住吉神社社叢:上浮穴郡久万町下畑野川, 八幡神社社叢:大洲市阿蔵, 八幡神社社叢:西宇和郡瀬戸町三机, 厳島神社社叢:南宇和郡御荘町平山)である。なお, ついでに記すと, 市・町・村の天然記念物については市指定11件(新居浜市3; 西条市1; 今治市1; 松山市2; 北条市1; 大洲市2; 宇和島市1), 町指定20件(越智郡波方町, 吉海町各1; 温泉郡中島町1; 伊予郡中山町1; 喜多郡長浜町1; 内子町1; 五十崎町1; 肱川町2; 西宇和郡保内町2, 瀬戸町1, 三瓶町1; 東宇和郡明浜町1, 野村町3, 城川町1; 井宇和郡三間町1, 広見町1), 村指定2件(上浮穴郡柳谷村1; 南宇和郡内海村1)が紹介されている。(里見信生)

○ 木村中外・藤田 卓・内藤俊彦・滝口政彦 宮城の野草 B6判, 224頁, 平成4年4月16日, 河北新報社(〒980 仙台市青葉区五橋1丁目2-28)発行。2300円+送料310円

宮城の山菜・宮城の昆虫につづく, 河北新報社の自然百科シリーズの3冊目である。

宮城県は地理的位置からみて冷温帯と暖温帯の移行帯にある。そのために県南や沿岸地帯に暖地性の種類が, また, 一方蔵王山や栗駒山など山地には寒地性の種類が分布するので, 宮城県に見られるシダ植物以上の高等植物は変種・品種を含めて, 約2500種が知られる。

本書ではその中から250種を取り上げ, 春に咲く野草, 夏に咲く野草, 秋に咲く野草, シダ類に分け, カラー写真と説明を加えて紹介している。

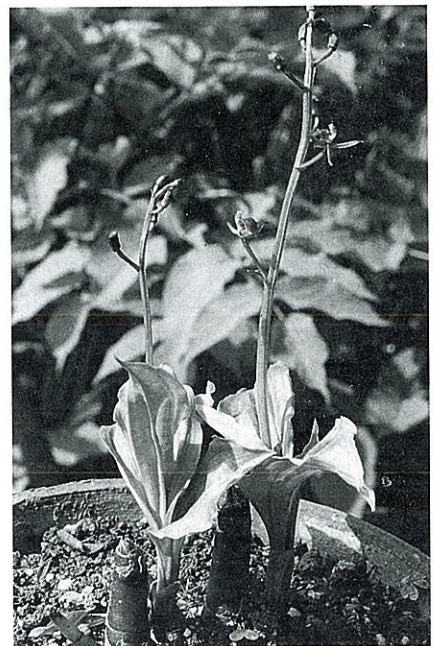
著者の4名は「宮城植物の会」に所属し, 年に何回か集って植物談義に花を咲かせる気の合った間柄と言われるが, 内藤俊彦氏が代表して, あとがきに「4名がそれぞれ分担して書いたので, 筆者それぞれの特徴が出ていて面白いのではないかと思う」と書いている。

これは共著の場合, 統一ということで, 代表者が朱を加えるのは通常で, この場合朱を入れ過ぎると, 各人の特徴が失なわれがちである。本書ではこの点に気がつけたことを言っているのかと思う。(里見信生)

○ コ克蘭の分布北限地(里見信生\*) Nobuo SATOMI\*: The Northernmost Locality of *Liparis nervosa*

「石川県でコ克蘭が採集されている」と鳥嶋昭信さんがしらせて下さったのは昨夏(1991)であったと思う。私は北陸ではこの種を, 若狭で採集しているが〔高浜町(小黒飯・東三ツ松), 小浜市(鯉川)], それ以北では見ていないし, また, その産を聞いていない。それ故に, その産地に御案内いただきたいとお願いしておいたことは勿論で, その結果, 昨夏(1991年7月24日), 現地を訪ねることが出来た。その場所は金沢市榎尾町で, そこは主として二次林で, 周囲にモウソウチクの植林地が多い。ウラジロガシが見られるところを見ると, 原植生はウラジロガシ林であったと思われる。当日, 綿密に探したが, 見出せなかった。発見者の中島忠さんをお訪ねしたところ, 鉢に植えていて, 平成2年10月1日に発見して持ち帰ったとのことである。その一部の分与を受け, その証拠に標本としたが, 再発見を期待したい。

ところが, ここに挿入した写真は加賀市作見町で, 堀野末男氏が, 本年6月29日採集し, 自宅で栽培しているものであるという。これを要するに, コ克蘭が若狭以外の北陸の地で見出されたことは興味深いことと言えよう。(\*〒921 金沢市久安町4-359, Hisayasu 4-359, Kanazawa 921, Japan)



- and ITO, K. 1992. Plant distribution in relation to the length of the growing season in a snow-bed in the Taisetsu Mountains, northern Japan. *Vegetatio* 98: 165-174.
- MIZUNO, K. 1987. The relationship between environmental conditions and time of flowering in *Primula cuneifolia*-*Potentilla matsumurae* communities of the southern Daisetsu Mountains, Hokkaido, Japan. *Jap. J. Ecol.* 37: 101-106. (in Japanese)
- OSTLER, W.K., HARPER, K.T., MCKNIGHT, K.B. and ANDERSON, D.C. 1982. The effects of increasing snowpack on a subalpine meadow in the Uinta Mountains, Utah, U.S.A. *Arct. Alp. Res.* 14: 203-214.
- RAM, J., SINGH, S.P. and SINGH, J.S. 1988. Community level phenology of grassland above tree line in central Himalaya, India. *Arct. Alp. Res.* 20: 325-332.
- SCOTT, D. and BILLINGS, W. D. 1964. Effects of environmental factors on standing crop and productivity of an alpine tundra. *Ecol. Monogr.* 34: 243-270.
- SONE, T. and TAKAHASHI, N. 1988. Climate in Mt. Daisetsu, as viewed from the year round meteorological observation at Hakuun Hut in 1985. *Ann. Tohoku Geogr. Assoc.* 40: 237-246.
- WIELGOLASKI, F. E. and KARENLAMPI, L. 1975. Plant phenology of fennoscandian tundra area.

*In*: WIELGOLASKI, F. E. (ed.): Fennoscandian tundra ecosystem part 1. Plants and Microorganisms. 316pp. Springer-Verlag, Berlin.

#### 摘 要

北海道大雪山系の雪田植物群落で、高山植物9種類(ハクサンボウフウ・エゾコザクラ・エゾヒメクワガタ・コガネギク・ミヤマキンバイ・チングルマ・キバナシャクナゲ・エゾノツガザクラ・アオノツガザクラ)の開花・結実フェノロジーを融雪傾度に沿った5つの調査区と比較した。消雪から開花までに要する期間と、開花から結実までに要する期間はそれぞれの種類に特有の有効積算温度によって規定されており、消雪の遅い場所においても繁殖活動に要する期間を短縮させるような種内レベルのフェノロジーの調節は見られなかった。従って雪解けの遅い1989年は消雪の遅い調査区で、種子成熟期間不足のため結実できない種類が多かった。気温の低い6月下旬以前に消雪する場合、消雪が早いほど開花に要する期間は長くなった。一方、6月下旬以降に消雪する場合には、日平均気温は10°C以上に上昇しており、消雪後開花までに要する期間はどの種類でも安定していた。草本植物や落葉低木は、気温が急激に低下する9月中旬以降に結実する場合、結実までに要する期間は長くなっている。これに対して常緑低木では低温の影響を受けにくかった。高山植物にフェノロジーの調節能力が欠けていることは、消雪時期の年変動の激しさと同様関係していると考えられる。(Received December 20, 1991)

○ 白山総合学術書編集委員会編 白山—自然と文化— 橋本確文堂企画/北国新聞社発行・発売。1992年11月20日発行。A4判, グラビア12頁+本文514頁。定価 16000円。

今年には白山国立公園発足30周年記念の年である。30周年を記念していろいろな行事が行われたが、この学術書の出版もその一つである。平成元年1月に金沢大学名誉教授細野義夫氏を委員長とする上記委員会が発足し、これまで集積された各分野の研究成果を集約しまとめた学術書とする一方、白山をよりよく理解し貴重な文化遺産が将来にわたって守られていくことの手助けとなるよう、より平易に記された啓蒙書とすることをねらって、縦書き二段組のスタイルの本書ができ上がった。これは、昭和45年に白山学術調査団による学術書「白山の自然」以来、22年ぶりの総合学術書である。

内容はグラビア・序文・序章・第一篇 白山のなりたち(地形・地質・古生物)、第二篇 白山の生物、第三篇 白山の歴史と文化(信仰・生活)、終章 白山地域の変貌と環境保全および地形・地質・火山地質の3種の付図から成る。植物関係の記事は、第二篇第一章「白山の植物」にすべて収められている。この章は第一節 植物相と植生、第二節 キノコ、第三節 岩間温泉の付着珪藻類および白山植物目録から成る。この企画は既存の資料を基に執筆し、新たな調査は行わないという条件で進められたため、決定版というにはほど遠い。たとえば「白山植物目録」は、シダ植物と種子植物をとりあげ、標本の裏づけのある種類に限るという原則で、暫定的に作成したもので現地調査で確認するという手数をふんでいないので、相当数の遺漏があるものと見込まれる。それにしても、この目録は今まで完成された目録がなかっただけに、新たな白山植物調査の礎石として貢献できるだろう。この目録の作成に関わった一人として今後、逐次、目録の完成に近づけていくつもりである。(清水建美)

にのみ出現する種にはコジュズスゲなどがあるが大きな差異を見いだせなかった。

NARUSE and GOTOH (1990) は、岐阜県におけるシデコブシ群落についての報告を行い、構成種の相違によって、ハンノキーイヌツゲ群集とサクラバハンノキーミヤマウメモドキ群落の2つに区分した。今回調査されたシデコブシ群落は、サクラバハンノキー・ミヤマウメモドキ・ハナノキなどのサクラバハンノキーミヤマウメモドキ群落の識別種が出現せず、またハンノキー・イヌツゲ・ショウジョウバカマ・ノリウツギなどの標徴種・識別種が存在することから、ハンノキーイヌツゲ群集に所属するものと考えられる。

### 3. シデコブシ群落の立地

各務原市周辺の丘陵地には、アカマツ・コナラ・クリ・アベマキを主とした二次林と、スギ・ヒノキの造林地が広く分布している。本調査地においても丘腹斜面は典型的な二次林となっており、比較的傾斜の緩い丘腹斜面の一部や崩壊地にスギ・ヒノキの造林がなされている。これらのスタンドにシデコブシはまったく含まれず、それは崩壊堆積面上に刻まれたリルにかぎって出現した。

本調査地のリルは湧水に由来するものである。この湧水は、崩壊地の途中から突然に現れて絶え間なく流れ続けており、地下水脈からのものであると推定される。リルはこの湧水に灌養されて湿地となっており、それは二つに区分された。ひとつは、湧水口近くの比較的傾斜が緩やかな、停滞水のある湿地で、ここではハンノキが優占していた。いまひとつは、地表水が明らかに流れている湿地で、ここではシデコブシが優占種となっていた。シデコブシ群落の成立には、このような流水の存在が知られており (UEDA, 1988)、今回の調査でもこのことが確認された。

菊池ほか (1991) は、シデコブシを含めた周伊勢湾要素植物群の立地についての報告を行い、これらのうちの多くの種が、湧水に灌養された湿地にのみ

出現することを明らかにした。さらにこの湿地には二つのタイプのあることを報告している。一方は丘陵地の谷底に発達するタイプで、流水は水路に収束する条件にある。他方は、斜面にあらわれた湧水口から水が流れだし、面的に拡散する条件を備えた湿地である。今回調査されたシデコブシ群落の立地は谷底に発達した湿地ではないものの、斜面に現れた湧水が拡散せずに水路を形成し、その底部に成立したものである点、前者のタイプに近いものであると考えられる。

### 引用文献

- BRAY, J.R and CURTIS, J.T. 1957. An Ordination of the Upland Forest Communities of Southern Wisconsin. *Ecological Monographs* 27: 325-349.
- 菊池多賀夫・植田邦彦・後藤稔治・佐藤徳次・高橋弘・高山晴夫・中西 正・成瀬亮司・浜島繁隆. 1991. 周伊勢湾要素植物群の自然保護. 24pp. 世界自然保護基金日本委員会. 東京.
- 成瀬亮司・後藤稔治. 1985. 岐阜市大洞のシデコブシ群落. *岐阜県植物研究会誌* 2: 12-19.
- . 1986. 岐阜市および各務原市のシデコブシ群落について. *岐阜県植物研究会誌* 3: 29-36.
- NARUSE, R and GOTOH, T. 1990. Phytosociological Study of a *Magnolia tomentosa* Community in Gifu Prefecture. *J. Phytogeogr. & Taxon.* 38: 61-65.
- 大井次三郎. 1975. 日本植物誌頭花篇改訂増補新版. 至文堂. 東京.
- 田川基二. 1959. 原色日本羊歯植物図鑑. 保育社. 大阪.
- UEDA, K. 1988. Star *Magnolia* (*Magnolia tomentosa*)-an indigenous Japanese plant. *J. Arnold Arbor.* 69: 281-288.

(Received January 11, 1992)

○ 亙理俊次 芝棟-屋根の花園を訪ねて 1991年11月25日発行。変形A4判, 302頁, 八坂書房。4200円。今では見るのが希な草葺屋根のうち、棟おさえに芝土をのせるものを芝棟という。そこにはイチハツを始めノカンゾウ、ヤマユリなど、さまざまな草花が植えられ、四季折々屋根を飾っている。本書はその屋根の上の花園を実に40年近くにわたって観察、研究されてこられた結果の集大成である。

本書は植物写真家として高名な著者の珠玉の写真で飾られたカラーの口絵、この研究の動機から始まって、草葺屋根と芝棟の作り方などを著者自身の観察と古老達の話をもとに解析し、芝棟に使われる植物を植物学的に解説し、家屋の老朽化に伴う芝棟の植物達の遷移、変遷を描き出している第一部総括篇、そして芝棟が東北から中部地方に見られること、近年どんどん消えて行っていることが著者が同じところに何度も足を運んで調査した結果で示されている第二部芝棟探訪篇からなる。本書を通して著者が消えゆく運命にある芝棟をさみしさと慈しみをもって見守っているのがよく分かる。評者も先生に師事していた頃、幾度か長野、群馬県の芝棟探訪にお供し、見事なイチハツの花を拝見したことがあるが、あの家はもう無くなってしまっているかと思うと、誠に残念である。消えゆく屋根上の花園を本書を片手に是非探訪されることをお勧めする。(鈴木三男)



○ エダウチヘラオオバコ (清水建美\*) Tatemi SHIMIZU\*: Occurrence of *Plantago lanceolata* L. f. *composita* FARWELL in Nagano

このほど、長野市在住の和田清氏から長野市屋島の千曲川河川敷で採集されたオオバコ属の標本が寄せられた。これは、ヘラオオバコではあるが、花序が単一ではなく、長短あるいは広狭さまざまに枝分れた奇異な姿をしたものであった。検定の結果、上記の学名をもつ品種とすべきものであることが分かったが、一種の奇型であると思われる。日本にはまだ報告がなく、和名も見当たらないので、エダウチヘラオオバコと名づけることにした。

標本：長野市屋島橋西千曲川河川敷，650 m，池田信三，1992年5月31日 (KANA 158123 および 158124)。  
(\*920-11 金沢市角間町 金沢大学理学部生物学教室，Department of Biology & Herbarium, Faculty of Science, Kanazawa University, Kanazawa 920-11, Japan)

○ 大井次郎著・北川政夫改訂 新日本植物誌 顕花篇 改訂版 至文堂，平成4年11月20日発行。B5判，1716頁。定価40,000円。

日本の植物学における歴史的な大作である大井植物誌は、著者の没後1983年4月に北川氏による改訂版が出された。実は10年ぶりにこの改訂版の改訂版が出版されると聞き、誰がどのように改訂したのか大いに関心をもっていた。このほど出版社から届けられた新版をみると、改訂というには前版の誤植を訂正した程度で、総頁数も1716頁と全く変りはなく、変わったところといえば、前版の単色写真版32頁が、高橋秀男氏の編集・撮影になる原色図版16頁71種の写真になったことぐらいである。大井植物誌といい牧野植物図鑑といい、原著者名を冠しつつ次第に原型を喪失していくのが果してよいことかどうか意見が分かれるところであろう。この意味で、今回は改訂版というより訂正版であったことは評価されることかもしれない。(清水建美)

○ 加藤陸奥雄・沼田真 (監修)・岩槻邦男 (編集) 滅びゆく日本の植物50種 築地書館，1992年11月10日発行。B5判，212頁。定価2060円。

今年6月、ブラジルで開かれた地球サミットでは、生物の多様性の保全が緊急課題としてとり上げられ、生物の種の保全は漸く世界的な関心事となってきた。日本でも環境庁を中心として動物・植物のレッドデータブックが発行され始めたし、国会では野生動物植物の種の保全に関する法律が成立した。植物関係では、1989年に自然保護協会の協力によってレッドデータブックがつくられた。そこには絶滅の危機に瀕する植物として895種がリストアップされているが、本書は特にその中から50種を選定し、生態的イラストと25名の研究者による生物学な解説を加え、広く植物の多様性保全を訴えるべく編集されたものである。

とり上げられた植物は、絶滅種がサクラジマハナヤスリ、シマホザキラン、オリヅルスミレの3種、絶滅危惧種がマリモ、アツモリソウ、フジバカマなど17種 (菌類2種を含む)、危急種がマツバラシ、ヒメバラモミ、エビネなど29種 (菌類1種を含む) とカンアオイ類、構成はそれぞれにイラスト1頁に解説2頁となっている。「これらの植物を救えるのは『あなた』です」というこの本のアピールが、実を結ぶことを心から願いたい。なお、同じシリーズとして動物篇・昆虫篇も出版された。(清水建美)

○ 土橋豊 観葉植物1000—種類の特徴から上手な栽培・管理の仕方まで— 八坂書房，1992年9月10日発行。B5判，279頁。定価5800円。

今では私たちはレストランへ行ってもホールに入っても必ずいろいろな観葉植物に出くわすし、自宅のベランダに観葉植物を置いている方も少なくない。しかし、観葉植物はほとんどすべてが外来植物であり、年ごとにふえ続けるだけに、正確に名を知り来歴を調べ栽培のしかたを学ぶことは並大抵ではない。こうした要望に応えるべく生まれたのが、このガイドブックである。

本書は3部構成となっており、第1部は観賞篇で103頁にわたる約700種類のカラー写真を収め、第2部は解説篇でシダ植物から始まり単子葉植物に終る科の配列の中で、属ごとに主な種類を挙げ、属ごとに栽培のポイントを解説し、属ごとに月別の園芸作業日誌を図示している。最後の第3部は参照資料篇として一般的な園芸知識の解説と新傾向の種類の紹介およびそれらの栽培データを含んでいる。収められた見事な写真、要領よくまとめられた解説記事、栽培のノウ・ハウをマスターすれば、この本一冊で観葉植物のイクスパートになることはまちがいない。(清水建美)

○ 松井光瑤・内田方彬・谷本丈夫・北村昌美 大都会に造られた森—明治神宮の森に学ぶ— 第1プランニングセンター製作・発行。1992年4月29日発行。B5判，143頁。定価2300円。

この本は主都圏の緑を代表する明治神宮の森の植物案内のすべてである。1. 森はこうして造られた、2. 植物学的にみた明治神宮の森、3. 永遠に森を守り育てていくために、4. 現代社会における明治神宮の森の存在意義の4章から成り、それぞれに、上記の著者の分担執筆という形をとっている。常緑広葉樹林にすべきかスギ林にすべきか、「永遠の杜」をつくるべき造営当初の論争など興味深い記事が満載されている。(清水建美)

駒嵜町付近では、峡谷はその深さをいっそう増しており、壯観であった。紅葉の時期に改めて訪れてみたいものである。谷底まで降りる時間のなかったことが心残りであった。

寺津付近は、チドリノキをはじめとするカエデ類の豊富な場所、とのことであったが、当班は予定より遅れ気味だったので、この観察地点は横目でみながら素通りした。

旧見定付近で、先発した2班のうちの1班と合流した。30年ほど前までは、車道から犀川をはさんで対岸に見える、谷急斜面の中腹に集落があった、とのこと。この付近では春先に山菜取りの老婆をよく見かけるが、以前この集落で生活していた人たちなのであろうか。当時の人々のたくましさに驚きを禁じ得ない。

犀川ダムにて3班すべて集合し、昼食となった。食事のあとに自己紹介を行い、清水建美先生、里見信生先生から、この地域の植生などについての解説をいただいた。また、徐博士から英語によるスピーチをいただいた。その後、周囲の山腹で目を引くニセアカシアの花が話題に上った。植栽されたものと考えてほぼ間違いないだろう、ということでは落ちついたが、通いなれたはずの場所であるにも関わらず、恥ずかしながらこの時まで、筆者はニセアカシアがこれほど多くあることに気付かなかった。たとえ既知の場所であったとしても、季節を違えて訪れることの大切さを改めて知らされた思いであった。

昼食の済んだ時点で一応解散となり、午後は、さらに奥まで足を延ばす班と、金沢市街に戻る班とに分かれた。ここから先は自動車は入れず、徒歩での観察行となる。ダム湖岸に隣接するブナ林まで、片道約30分の行程である。途中のカン谷周辺では、ミヤマカワラハンノキの群生やクロバナヒキオコシ、ツリフネソウ、ミヤマイラクサなどが観察された。各自、思い思いに観察・採集を行いながら往復した。

最後に、有志により犀鶴林道に足を延ばした。この林道は、駒嵜町から熊走・国見山南稜線を経て鶴来町まで続く予定のもので、現在整備中である。自動車で10分ほど走ったところで観察を行い、その後、各自帰路へとついた。

今回のコースは、犀川の中流域から上流域の溪谷林、犀川ダム周辺のブナ林と変化に富んだものであった。また事故もなく、天候も予想以上に崩れることなく、充実した一日となった。(依田清胤)

---

## ○ Plant Molecular Evolution Newsletters—an informal forum for the exchange of idea and data について

ここ10年ぐらいの間に、生物の類縁をDNAのデータに基いて解析しようとするいわゆる分子分類学・分子系統学・分子進化学の諸分野がいちぢるしく発展して来た。中でも、植物学の分野では、葉緑体DNAが比較的とり扱い易く、構造も保守的であるとの理由からどんどん使われることになった。本誌でも、私が39巻1号に植物分子分類学の状況をレビューした。そのうち本誌にも本格的な分子分類学の論文が登場することになるだろう。

ところで、私は1990年秋に日本におけるこの分野の発展を願い、植物分類・地理学・分子遺伝学・分子生物学・生物統計学など関連する諸分野を糾合し、「植物分類・分子系統研究グループ」を発足させ、その年の10月から季刊のNewsletter for Plant Molecular Systematicsの発行を始めた。この研究グループは現在85名のメンバーの規模となり、ニュースレターは、本年10月で第9号となった。

面白いことに、このような考えは誰でももつものみえ、実は国際的な植物分子系統・分子進化学の情報交換の場を作るという動きが出てきた。つまり、今年1月ドイツのケルンで開かれたUNESCO Conference on Plant Molecular Phylogeneticsの席上、表記のNewsletterを季刊として発行することが決められた。そして、今年7月、私達のNewsletterにおくれること1年9ヶ月にして創刊号が出版された。

このNewsletterは、世界中の研究者が効率よく研究を進めることをねらい、論文にもものらずデータベースにも入っていない生々しいデータや研究状況を、筆者の原稿のスタイルそのままに印刷・製本して、迅速に配布することを目標につくられている。たとえば、創刊号では世話役のP. G. Martinさんは、現在サトイモ科・イディオスペルマ科・ヤマモガシ科ほかの18sおよび26s rRNAの塩基配列のデータが印刷中、ヤマモガシ科・シキミモドキ科などのrbcLの塩基配列を決定中、1993年にはマキ科のrbcLの塩基配列決定を計画中であることを報告しているし、第2号ではBremerがリンドウ目全体の系統関係を葉緑体DNAのRFLPやrbcLの塩基配列決定を通して研究中であることを述べ、JansenやPalmerもそれぞれ現在の研究状況を紹介している。このNewsletterに関心をお持ちの方は、W. Martin, Technische Universität Braunschweig, D 3300 Braunschweig, Germanyに照会されたい。(清水建美)